

人文学部の
今を伝える

人文ニュース<アゴラ>

47巻2号
山形大学人文学部
2015.12.24

Agora

“AGORA”とは、ギリシャ語で“広場”という意味です。

写真で教員の研究を
楽しく紹介するコーナー

ふぁんたすていっく!

『環境経済学ってどんな学問?』と聞かれたらどう答えますか。すぐに思いつく答えは、「経済学の応用分野」や「環境問題を経済学的に取り扱っている学問」だと思います。でも具体的には、どんな問題を取り扱っているのかは不透明だと思います。取り扱っている問題は、大気汚染、水質汚染、土

壌汚染、地球温暖化、エネルギー問題、生物多様性、都市計画、廃棄物問題、貿易など幅広いものとなっています。研究のアプローチも多様で、経済理論やデータを用いた実証分析などがあります。

次に、1つの疑問が浮かぶと思います。『そもそも環境と経済は、両立するのだろうか。』『経済を重視すると、環境は軽視されてしまう。』一方、「環境を重視すると、経済が停滞してしまう。」というジレンマがあります。日本の経験を振り返ると、戦後、経済成長を重視した結果、水俣病をはじめとする多くの公害病が発生しました。今でも、PM2.5の問題、光化学スモッグ、地球温暖化問題など多くの環境問題が発生しています。そのため、環境と経済が両立しているようには思えません。しかし窒素化合物や硫黄化合物の排出量は、経済成長とともに減少していることが報告されています(経済と汚染のデカップリング)。すなわち、両者のバランスをとることが重要になります。私は、環境経済学を専門分野としており、環境経営、廃棄物政策、再生可能エネルギー政策など幅広く研究を行っています。特に関心を持っているテーマは、「実現可能な温暖化政策は何なのか」です。これは、経済と環境を両立して、持続的な社会をどの様に築いて行くのかということになります。

私のゼミナールでは、ゼミナール活動を「学びの集大成」として位置付けています。そのため、法律・政治・経済・経営で学んだことすべてを融合して個別のテーマ(環境問題)に取り組んでいます。今年は、再生可能エネルギー、スマートシティ、エコラベルと廃棄物問題に関して研究をしています。研究を遂行する際には、専門家・政策担当者を交えた研究会(写真1)、夏合宿(写真2)やフィールドワークを実施しています(例:県内の市町村で使用されているゴミ袋の収集(写真3))。さらに研究成果を他大とのインゼミで報告しています。

これからも、持続可能な社会を構築していくための方策を様々な観点から研究していきます。また環境経済学をより多くの方に知ってもらい、持続可能な社会について考える機会を増やすのに貢献していきたいと思います。

法経政策学科 准教授 杉野 誠(環境経済学)



写真1: 専門家・政策担当者を
交えた研究会



写真2: フィールドワークを終えて
研究報告



写真3: 県内の市町村で使用
されているゴミ袋

山形大学人文学部
facebookページ
ぜひご覧ください。



人文学部 @LINE 開設しました!



我が青春と音楽と

学科長
インタビュー

中村 隆
人間文化学科長・教授(英文学)



—中村先生は秋田のご出身だそうです。秋田のどの辺で育ったのですか？

2才から5才頃まで、象潟という海が見える町に住んでいました。その後、大曲を経て、横手に住みました。大曲は花火大会で有名ですね。大曲の花火大会は、夏の終わりを告げる華やかな風物詩でした。横手には「かまくら」がありました。水神を祭った雪の小さな家ですが、その中で子供たちが甘酒を飲むのが慣わしでした。

—中村先生が大学に入ったのは、1980年ということですが、その頃の大学の様子や学生時代のことをお聞かせください。

当時の大学は、良く言えば、自由奔放、悪く言えば、野放しで、たとえば、成績を知りたければ事務に来いという具合でした。私は聞きに行かなかったので、教養部時代(大学2年まで)の成績は不明です。

大学3年になると専門の授業が始まりました。専門に移るや否や風景は一変し、異様な詰め込み教育の時代に入りました。英文学を専攻したので、研究社の「英和大辞典」という厚さ7、8センチほどの巨大な辞書を朝から晩まで、毎日引きました。そのせいか、学問は快楽の部分は少なく、苦行といった感じがします。

—その頃の大学生と今の大学生を比べるとどう思われますか？

なかなか難しい質問ですね。基本的には、同じだなという気はします。私が大学生だった頃、若者を表す言葉として「新人類」という表現がありました。学生運動は完全に下火で、情熱的でなくなっしまい、学生同士の連帯感も薄く、シラケた世代を皮肉る表現だったのだと思います。しかし、シラケて見えるのは、表面だけで、内部にはマグマのような情熱がありましたよ。それは今も同じじゃないですか。

—中村先生は携帯電話が嫌いだそうです。それはなぜですか？

妙なことを聞くのですね。マックのコンピュータは好きですが、そして、持っています。iPhoneは好きではありません。iPhoneは精密機械としては美しいと思いますが、私には無用の長物です。

—中村先生はクラシック音楽がお好きだそうです。その話をお聞かせください。

私は青春の半分をクラシック音楽に捧げました。そして、残りの

半分をある女性に捧げました。後者はうそですよ。クラシック音楽に目覚めたのは高校2年の秋口だったと思います。NHK-FM放送で、ベートーベンの交響曲第7番と第8番が流れてきました。私は雷に打たれたような気持ちになりました。学生の頃は、クラシックと名がつくと手当たり次第に何でも聞き、最終的には、マーラーとバッハに落ち着きました。マーラーの巨大な交響曲群を初めて生で聞いたのはロンドンに半年ほど滞在していた時です。バッハの音楽は私にとっては神の顕現というしかありません。

—それはどういう意味でしょうか？

バッハは人類の奇跡という意味です。と言ってもわかりませんよね。どうぞ、バッハの音楽に耳を傾けてください。永遠の前衛音楽もしくは不朽の現代音楽がそこで鳴っています。どうも、説明するほどに迷路に入る感じです。端的に言えば、森の中の鳥の声を私たちが美しいと感じますね。バッハの音楽は澄明な鳥の声なのです。

—最後に一言、学生へのメッセージをお願いします。

10年以上も前に教えたある学生の思い出話をしましょう。卒論指導の際に、私は学生に「今までどんな本を読んできましたか？」と尋ねることがよくあるのですが、その学生は「『赤毛のアン』が好きです。この本は私の魂の書です」と答えました。

魂の書！

実は本好きであるにもかかわらず、その時点でそのような本が私には思い浮かばなかったのです。幸いにして今はあります。皆さんも「魂の書」を見つける旅をしてみてもいいのではないでしょうか。



経済学に全く興味がなかったのに、気が付いてみると…

学科長
インタビュー

是川 晴彦
法経政策学科長・教授(ミクロ経済学・公共経済学)



—ミクロ経済学のご担当ですが、なぜ経済学を研究するようになったのでしょうか？

大学時代にミクロ経済学ゼミの募集案内を見たとき、一般均衡とか厚生経済学といった言葉に何となく魅力を感じました。ミクロ経済学なら公務員試験にも役立ちそうだと考え、入ゼミを決めたのが経済学との出会いです。このゼミの志望者には初回のゼミまでにミクロ経済学のテキストの練習問題を全部解いておくという課題が出されていました。私はミクロ経済学を履修していなかったのに、春休みに必死でテキストを読み、問題を解きました。その過程で、モデルを用いて家計や企業の行動を分析することに興味を持つようになり、さらに、ゼミを通して、様々な経済現象を理論的に解明していく経済学の面白さに目覚めました。気が付けば現在に至っています。

—先生のご専門をもう少し詳しく話してください。

課税政策が経済に及ぼす効果について一般均衡モデルを用いながら分析する研究を進めてきました。現在では、分析対象を不完全競争市場に拡張、効率性損失の尺度についても研究しています。また、近年、公共経済学の視点から、自治体の行政評価や中心市街地活性化についても分析を行っています。

—講義ではどのようなことに留意しているのでしょうか？

一つのテーマを解説する際には、直観的な意味づけ、図を用いた解釈、そして数式による一般化というプロセスを大切にしています。図を用いた解説がわかりやすい人もいれば、数式ならよくわかるという人もいます。人によって理解しやすい方法は異なります。そのため、まずは、自分に合った方法で理解し、そのうえで他の方法による解釈にも挑戦するという勉強が実現できる講義を心がけています。また、学生の皆さんには理解できたという喜びを味わってほしいので、講義では事例や数値例を多く取り入れて、理解がしやすくなるように努めています。

—学生の皆さんへ伝えたいことはありますか？

学問との出会い、そして人との出会いを大切にしてほしいと思います。私は経済学部を選んでいながら高校生まで経済に興味がなく、また、在籍していた大学自体も希望していた大学ではなかったので、ゼミに入るまでは本当に無気力な学生でした。さすがに、このまま学生生活を続けたのでは何も残らない、何かしなくては、と焦り始めた時に、先に述べたゼミの募集案内を見たのです。本格的に

勉強してみると経済学の面白さを感じ、また、勉学に力が入ると学生生活も前向きになり、その結果、教員や友人との交流が深まってくることになりました。皆さんの中には現状に満足していない方もいるかもしれませんが、投げやりな態度のまましていると、学問との出会いや人との出会いを自ら放棄してしまうことになり、皆さんがいろいろな面で成長できる可能性が失われます。これは大変もったいないことです。与えられた環境でまずは頑張ってみると何らかのチャンスが生まれてきますので、そのチャンスを逃さず生かすことが大切だと感じています。



—なるほど。法経政策学科ではどのような出会いがあるのでしょうか？

法経政策学科には、法学・政治学・経済学・経営学といった社会科学の諸分野における重要な科目がそろっています。カリキュラムにおいても1・2年次では基礎的な科目を、3年次以降では発展・応用的な科目を学べるように工夫してあります。皆さんには、1・2年次のうちに社会科学の基礎科目をいろいろと学んでもらい、これならもっと深く学んでみようと思える学問領域に出会ってほしいです。また、3・4年次の演習では、専門知識を深めるとともに、論理的に思考し説明する力を身に付けてもらいます。この力は皆さんが卒業後に社会で活躍する際に、とても役に立つものですから、演習で学ぶ機会も積極的に生かしてほしいですね。

新任教員紹介

新任の教員から皆さんへごあいさつを申し上げます。



人間文化学科 准教授 宇津 まり子（英語・アメリカ文学）

2015年4月に着任いたしました、宇津まり子と申します。山形市に来る前は、米沢市に15年間住んでいました。県内ですし、運転しても1時間少しなので、少なくとも気候についてはそれほど変わるところはないと思っていました。でも実際に住み始めてみると驚きの連続でした。まずは太陽光線の強さが違いました。最初の数ヶ月は、余りの明るさに涙が出て（感動している訳ではありません）、午後になると目が真っ赤に充血していました。それに慣れた頃には、今度は37度など、今まで経験したことのない暑さがやってきて、気候に関しては驚かされるばかりでした。暑さは正直、うんざりしましたが、これからの後期、冬の気候の違いには期待しています。

私の専門はアメリカ文学で、今は19世紀末に活躍したケイト・ショパンという女性作家の研究を進めています。当時も一定の名声を勝ちえて、特に

南部ルイジアナの地方色を描き出す短編作家として知られていましたが、死後はほぼ忘れ去られていました。1970年代のフェミニストが再発見し、今ではアメリカの大学の授業で必ず読まれる作家の一人になっています。70年代が受容の契機なので、女性の抑圧や解放という視点から長らく解釈されてきたのですが、私はあえてショパンを19世紀末という文脈に戻して、当時のアフリカ系の人々や女同士の関係に対する態度や表象法の変化を考慮した上で、解釈し直したいと考えています。

赴任してあっという間に半期が過ぎてしまいましたが、学生時代も含め、私は大きな大学を経験したことがなく、山形大学の組織毎の独立性や複雑さに戸惑うことの連続です。全体像が見えてくるまでにはまだ時間がかかりそうですが、まずは学生をよく見て授業を工夫し、フィードバックをもらっては改善するということに努めたいと思います。不慣れゆえに、ご迷惑をおかけすることも多々あると思いますが、どうぞよろしくお願いいたします。



人間文化学科 講師 柿並 良佑（現代フランス哲学・表象文化論）

2015年4月に人間文化学科に着任した柿並良佑です。関東で生まれ育ち、最近では2年間京都におりましたが、このたびご縁があって山形に参りました。

私の専門は現代フランス哲学です。古代より積み上げられてきた哲学の知見を貪欲に摂取しつつ現代の問題に取り組む姿勢を、同時代

の思想家の書物を読みつつ、日々学んでいます。特に、「グローバル」という言葉がこれだけ叫ばれる今日、依然として個人や国家の「アイデンティティ（自己同一性）」という旧来の考え方が根強く残っている（あるいは帰帰する）のは何故なのか。そのような問題意識から哲学的主題としての「共同体／共同性（コミュニティ）」に取り組んでいます。またヨーロッパで発展を遂げた哲学という分野は宗教（特にキリスト教）と切っても切れない関係にあります。その歴史についても研究しつつ、現代政治における「宗教の帰帰」と呼ばれる現象に対して、哲学はどのような立場をとることができる

のかを考えています。こうした研究はしばしば「無宗教」と呼ばれる「我々日本人」なるものの自明性を問直すことにも繋がっています。

大学の授業ではフランス語や「表象文化論」という分野の講義などを担当しています。表象文化論とは、哲学や批評理論を駆使し、映画やアニメといった「サブカル」も含めた文化現象のダイナミクスを総体的に捉えることを目指す学問です。皆さんの身の回りのCM、ポスター、ファッション・アイテム等がどのような記号のシステムによって生産され流通しているのか、そんなことも学問の分析対象となります。

話は変わりますが山形は日本有数の蕎麦処と知って、蕎麦好きな私には日々の食事が大きな楽しみとなっています。牽強附会と思われるかもしれませんが「蕎麦と哲学」と言えば、東北には「そば打ちの哲学」、「そば往生」という香気に満ちた2冊の蕎麦論を世に送った石川文康先生という哲学者がいらっしゃいました。先達に倣って、いつか「蕎麦の表象文化論」を立ち上げたいとひそかに夢想しつつ、皆さんと一緒に山形の、そして東北の魅力を味わい尽くしたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



人間文化学科 准教授 十川 陽一（日本古代史・法制史）

2015年4月に着任しました。私自身は横浜の出身ですが、親は大阪、祖父は徳島の生まれですので、世代を経るごとに東へ移ってきています。ともあれ、湿気の多い地域で暮らしてきた私にとって、山形の気候はとてもさわやかで、気持ちよく日々を過ごしています。これから

冬を迎えても、また新鮮な驚きに出会えるだろうと楽しみにしています。さて私は、日本史の中でも、主に古代の法と社会について研究しています。古代というと、皆さん馴染みがうすいかもしれませんが、ただ、日本史の時代区分の中で国のありかたを一般的に何と言うか、思い返してみると、近代国家・幕藩体制・武家社会・律令国家、というように、「国家」と呼ばれるのは近代と古代だけだということに気づきます。つまり、近代国家が成立する以前、日本列島に唯一存在した統一国家が、古代の律令国家なのです。それだけに律令国家の影響は、日本列島・日本の歴史のあちろちら

に見ることができます。現代の我々にとって身近な例としては、地名が挙げられます。日本の地名の多くは、漢字2文字で表記されることが多いのですが、この下敷きには、奈良時代に全国的に行われた表記統一が存在しています。

ちなみに私の「十川」という苗字、元々は香川県に多いもので、現在も香川県高松市に十川東町・十川西町という地名が残っています。平安時代の百科辞書『和名類聚抄』には全国の地名が載っていますが、この本でその付近のことを調べると、讃岐国山田郡に「蘇甲」という郷がみえます。この本には読み方も書いてあるのですが、いわく「曾加波」、そう、「そかわ」もしくは「そがわ」です。自分の苗字が古代までさかのぼると考えたとき、改めて古代国家の影響力の大きさを感じます。私の名前は一例ですが、ほかにもたとえば山形という地名も、『和名類聚抄』には「山方」としてみえていて、古代にさかのぼる地名です。このように古代を身近に感じながら、日本の古代国家について考えてみませんか。



人間文化学科 准教授 宮腰 直人（日本古典文学）

2015年4月に人文学部人間文化学科に着任しました。3年ほど暮らした横浜を離れ、山形に参りました。山形は朝夕さわやかで過ごしやすく快適です。ある夏の夜、見上げた夜空の星を見て、はじめて「またたく」という言葉を実感した気がします。冬はきっと厳しいでしょうが、それでも何か新たな発見があるのではと

楽しみにしています。

私の研究テーマの一つは、日本の物語絵です。近年は主に室町期から江戸時代前期に数多く制作された、お伽草子や語り物文芸の絵巻や絵本を研究しています。義経の冒険譚や流浪の姫君の哀話、神仏の由来と霊験譚等、多くの物語・説話が絵巻や絵本で伝存しています。

前近代の人びとは、テキストだけでなく、本文に対応して描かれた挿絵によっても物語に親しんでいました。著名な絵師が描いた挿絵はもちろん、アマチュアの手になる、一見簡略で素朴な挿絵をみても、読者と

物語が屈託のない、幸福な関係であることが垣間見えます。通常、テキストは「文学」、挿絵は「美術史」と区分けされることが多いですが、実際の享受の場では、両者が協力して、様々な「方法」で読者に物語を語りかけています。その「方法」をことばと絵の表現にそくして解き明かしたくて、研究を始めました。

物語や説話が、なぜ読み継がれてきたのか、人びとの暮らしでどんな役割を担っていたのかを考えるためには、美術史や、歴史学、民俗学等の人文諸学の成果にも積極的に学ぶ必要があります。まさに「言うは易く行うは難し」ですが、皆さんと一緒に学びながら地道に研究を進めたいと考えています。

学生の皆さんには、多様な価値観をもつ人文学部の先生方との勉強や交流を通して、心躍るような研究テーマに出会ってほしいと願っています。簡単には見つからないかもしれませんが、それだけに出会えたときの喜びは大きいはずです。その出会いのお手伝いが僅かでもできたら、こんなにうれしいことはありません。



法経政策学科 講師 亀井 慶太（国際経済論）

2015年2月に、「国際経済論」の担当教員として山形大学人文学部法経政策学科に着任しました亀井慶太と申します。出身は秋田県です。大学（院）時代では居住地が二転三転しましたが、就職は故郷の隣の山形県となり、たいへんに帰省しやすくなりました。私が秋田県を出たのは18歳の高校卒業時ですが、そのとき初めて新幹線に乗り（浪人生活をおくるため）仙台に向かった時のことを懐かしさと（物悲しさ）ともに思い出します。当時、秋田県からわずか2時間30分程度で、仙台という都市に到着できることに驚きました。その頃から10年以上経過しましたが、各地・各国の交通・輸送網は随分と発達し、人・モノ・サービスの行き来がさらに活発になったように感じます。

私は財・サービスの国際間取引の研究-国際貿易論-を専門領域として

います。国際貿易と言われてもあまりイメージが湧かないかもしれませんが、実のところ皆さんは大なり小なり貿易に参加しているはずなのです。一つ例を上げてみましょう。みなさんの持っているスマートフォンはiPhoneでしょうか？もしそうであれば、その時点であなたは立派に国際貿易に参加しています。アップルは米国の会社ですから、「いいいや私のスマートフォンは国内ブランドですよ」と言っているあなた。そのスマートフォンの部品はすべて日本製でしょうか？外国産の部品が入っていれば、あなたは立派に国際貿易の進展に貢献しているのです。ここでは携帯電話に言及しましたが、試しに身の回りのモノの産地を調べてみてください。思いの外、純粋な日本製は少ないと感じることでしょう。そうなのです、私達の生活は外国の生産活動で成立していると言っても過言ではないのです。では、このような状況が成立していること自体、はたして良いことなのでしょう？この疑問を経済学的な視点から解き明かしていくのが国際貿易論なのです。



法経政策学科 講師 村松 怜（財政学）

「経済政策論」、「日本経済論」の担当として2015年4月に着任いたしました。専門は財政学・日本財政史です。財政学といっても、応用経済学としての財政論の研究ではなく、日本の財政、特に税制に関する歴史的な研究をこれまで行ってきました。

日本の現在の財政は世界最大の借金を抱えていることで有名ですが、一方で、他の国よりも財政支出が大きいわけではなく、むしろ「小さな政府」に属すると言われる。つまり、財政規模が大きすぎるがために、世界最大の借金を抱えるに至ったとは言えません。むしろ、借金増大の大きな要因は税負担の小ささ、つまり収入のほうがいかに小さかったことにあります。消費税を8%に、あるいは10%に引き上げたとしても、日本は「税の重い国」ではないのです。それでは、「日本は税が軽いのであるから、文句を言わずに増税すれば良い」という簡単な話なのかというと、そうではあり

ません。そこには、先進国最低レベルの税負担であるにも関わらず、増税への抵抗が非常に強い日本の姿があります。ただ単に増税を強行するだけでは人々の不満が高まるばかりでしょう。

一方、他の国に目を向けると、税負担が日本よりもずっと高いにも関わらず、不満の小さい国があることがわかります。そこでは「税が人々のために使われている」という感覚があるため、高い税負担に対しても不満・抵抗が少ないと考えられます。反対に日本では、そのような感覚が少ないと考えられるのです。

このように財政赤字という問題は、政府に対する人々の信頼が大きく関係していること、そして財政がその信頼のあり方に大きく関わっていることがわかります。財政学は、ただ単に国のお金のやりくりについて学ぶということではなく、財政と社会との相互作用を明らかにするものでもあるのです。経済学とはまた違った面白みがあると思いますので、ぜひ学んでみて欲しいと思います。

異文化間コミュニケーションI 帰国報告

2/28
成田空港発

3/15
成田空港着

Philippines
Cebu

異文化間コミュニケーションI (セブ) 参加者

島田 郁 舞木 和 佐野 歩美
齊藤 望 會田友里子 勝又 浩志
多田 和己 阿部 史明 (理学部)

2015年2月28日～3月15日にかけて、フィリピン共和国セブ市のサン・カルロス大学で異文化間コミュニケーションIを実施し、8名の学生が受講しました。今回の実習の主な内容は以下の通りです。

- (1)サン・カルロス大学での2週間60時間の英語集中研修。
- (2)週末のボホール島1泊2日の小旅行。
- (3)セブ市内でのフィールドワークと、英語による研究成果発表会。
- (4)サン・カルロス大学の学生とともに日本とフィリピンの料理を作って食事会を実施。
- (5)ストリートチルドレンの収容施設であるバライ・サマリターノを訪問し、子どもたちと半日にわたって遊び倒しつつ給食の準備も手伝うボランティア活動。



研修開始時のオリエンテーション



教室でもみっちり勉強しました



フィールドワークの成果を発表



研修開始時の歓迎ディナー



料理を通じて文化交流!



セミプロ料理人たちを相手に頑張る



バギーで特設コースを走る!
日本ではめったにできません



ボホールの洞窟で記念写真!

山形大学からの参加学生にとって、フィリピンは初めて訪れる国でしたが、サン・カルロス大学の学生がそれぞれにアシスタントとして割り振られ、安心して学業に取り組めたとのこと。また、フィールドワークや放課後の余暇など、サン・カルロスの学生とは何かと一緒にいる機会が多く、楽しみながら英語コミュニケーション力を向上させるには最適の環境だったと言えるでしょう。

なお、今回の実習はふすま同窓会の費用補助を受けて実施されました。



ストリートチルドレンの
保護施設を訪問



研修終了後のお別れ夕食会



体力勝負!



フィリピン料理に飽きた時は...
ラーメンもあります



最後はみんなで踊る、踊る!

8/29
仙台空港発

9/13
仙台空港着

Taiwan

異文化間コミュニケーションI (台湾) 参加者

小林 那奈 茂木 康 森岡 千春
吉岡 慧 齊藤 春 渡邊 唯
亀橋あかり 菅原 柚希 五十嵐 諒
齋藤 夏紀 鈴木紀羅良 (理学部)
高橋 美帆 千葉なつみ 大和田 純
阿部 颯太 梨子 桜子 (理学部)
菅原 奏美
米田 愛未
舩田 和泉
門馬なつみ
上林 有紀



9/3故宮博物院見学



9/4宜蘭・亀山島見学



9/5日本語世代の
ご老人にインタビュー



楽しくお話を聞く
ことができました



9/7合同研究スタート
(同伴の師範大生とわくわく初対面!)



9/8中間報告会
二日間の成功例や失敗談を
踏まえて、明日もがんばろう!



9/8～11師範大生同伴で街頭調査
中国語で台湾市民に声をかけてみました!



お別れはつらいものです...



9/11修了式
実りある2週間となりました



師範大生の皆様、お世話になりました!
今度は山形で会いましょう!



8/29着いたその日に
マンゴーかき氷!



8/30九份・古町めぐり



8/31 歴史と伝統に満ちた
台湾師範大学めぐり

公共政策学演習・行政法演習の合同夏季研修を終えて

法経政策学科 講師 川村 一 義 | 法経政策学科 准教授 和 泉 田 保 一

去る9月12日(土)・13日(日)の両日、公共政策学演習(担当:川村)と行政法演習(担当:和泉田)の合同夏季研修を、作並温泉(仙台市青葉区)で行いました。両演習とも、早い段階から夏季研修を行う予定でしたが、どんな分野にも対応できる政策立案能力の修得という目標が同じであり、そのためには政策科学と行政法学の双方を学んでおく必要があるという認識を共有したため、実現に至ったものです。

学生には、実務家の方に評価して頂くことを前提に、市町村レベルの政策課題を自由に選び(政策課題に優先順位を付けられるか否かも能力の一つです)、調査も行った上で、報告書を提出するよう指示しました。その際、緊張感とトレーニング効果を高めるため、①現実には、政策課題の性質や所属組織の特徴をふまえ、グループを組むか個人で行うかも重要な判断なので、作業単位には一切介入しない、②よほどの場合を除き、報告書は事前に審査しない(ぶつつけ本番)という方針を採用しました。案の定、本番では、良くも悪くも多様な報告が展開されました。

研修には、講師として仙台市職員の方にお越し頂くとともに、関心を持たれた東北大学の先生もオブザーバーとして参加されました。テーマは実に様々でしたが、大まかには都市のあり方、福祉、学校教育の三つに分けられました。注目の結果ですが、個人報告や二人組のグループ報告の完成度が高くなりました。極めて短い準備期間も考慮すると、作業人数の多さと効率性は決して比例しないこと、本当に関心を寄せて作業を行えるか否かが決定的であることを確認させる結果でした。こうした実験的研修であるにもかかわらず、お二人からは、学生の意欲を駆り立てる温かいご助言を多数頂きました。

最後に、ご記憶の方も多いと思いますが、研修前日まで、宮城県は初めての大雨特別警報が発表されるほどの豪雨に見舞われました。仙山線は運休し、研修会場も避難勧告対象地域に含まれるなど、一時は実施が危ぶまれました。それにもかかわらず駆けつけて下さったお二人には、本当に感謝し尽くせません。さらに、何事もなかったかのように集まってくれた学生諸君にも、心より敬意を表するものです。

公にはなかなか聞けないお話も多数頂きました。真の意味での政策立案能力の修得には何年、何十年とかかるわけですが、社会に貢献する(公共人材)を一人でも多く送り出せるよう、これからも精進してまいります。



各政策課題について議論する参加者たち

フェスティヴァリエは存在するか ——山形国際ドキュメンタリー映画祭における山形大学人文学部の映画交流

人間文化学科 准教授 大 久 保 清 朗

いったい、山形大学の教員・職員・学生のなかでどれくらいの人間が、山形国際ドキュメンタリー映画祭のフェスティヴァリエになったことがあるのだろう。そもそも学内で、この映画祭はどれほど認知されているのか。

われわれ(人文学部のごく一部の教員のこと)にとって、この映画祭は2年に1度襲来する超大型の台風だ。開催1ヶ月前あたりから非常警戒態勢となり、日々の大半がその対応に忙殺される。とはいえ、やはりそれはごく一部で、大半の人間にとって映画祭は存在しないに等しい。開催期間中に「映画祭っていつやるんですか? えっ、今やってるんですか?」と、学生のひとりから言われた。学内に祝祭の非日常性を共有しようという連帯の意識は希薄だ。では映画祭のあと、われわれに何が残るのか。一抹の安堵。底知れない徒労感。そして、業績リストに追加される地域貢献の事項……。

大学院生時代、ラ・ロシェル国際映画祭での体験が思い出される。彼の地で何度も聞かれたのは「あなたはfestivalierか」という問いである。フェスティヴァリエとは祭典参加者を意味する。「はい」と答えれば、もうそれだけで地元住人と外国の訪問者とのあいだに連帯感が形成される。空疎なレセプションやら冗長な乾杯の挨拶など皆無だ。

そこで、冒頭の問いに戻ろう。山大にフェスティヴァリエはいるか(ところで、これを読むあなたは映画祭のfestivalierでしたか?)。



マンツォーリ氏による講演



香港浸会大学との交流

人文学部で映像学の教鞭を執る表象文化論分野の教員として、映像文化研究所の所員として、この問いに自信を持って答えられないのが残念だ。

だが、それでも、小規模ながら有意義なイベントが確実にあった。ひとつは、10月9日にあった香港浸会(しんかい)大学とのイベントだ。参加した学生は10人に満たない。それでも、参加した学部生たちは、イベント後も香港の大学院生たちとコンタクトを取り合っている。これは真に国際交流に値するといえないだろうか。それから、10月15日のポーニャ大学教授ジャコモ・マンツォーリ氏の講演会だ。ここでも参加者は30名ほどの学生ではあったが、高度な内容のイタリア映画史講義がなされたことは特筆されるべきだろう。

映画祭の成否は規模の大小ではない。ジャン・ルノワールにならえば「人間の邂逅」があったかどうかだ。その意味で、この2つのイベントではかろうじてそれがあったと断言できる。2つのイベントの参加者たちは、まぎれもなく映画祭のフェスティヴァリエであったといえる。

ナスカだより

山形大学名誉教授 阿子島 功

約2000～1200年前の地上絵が消えなかったのは

なぜか：ナスカの地上絵は、動物や植物の図像、台形や渦巻の幾何学図形、無数の長い線などがあります。砂や礫(砂利)からできている台地の表面の、風化して黒くなった部分を動かして、まだ風化していない地下の明るい色の地層を露出させて描いています。動かした表面の砂礫の厚さは数cmから10数cm程度です。約2000～1200年前に人の手で動かされた状態がそのままになっている理由はいくつかが考えられます。

雨は統計上年平均2mm以下とほとんど降らないため流れる水によって侵食される機会が少ない、数年に1回程度ごく狭い範囲に強い雨が短時間降ることがあるが地上絵の多くは水の来ないところが選ばれていた、強い風が吹くことがあがるが風によって礫は動かされず、砂が積もって地上絵が覆い隠されるほどではなく、むしろ吹き払われるなどです。写真などで紹介される地上絵がはっきりしているのは、発見・復原されて(先導的研究を行ったマリア・ライヘ女史は筆も使った)以来、文化庁がときどき手入れをしている、低みにかすかに積もる白い砂が地上絵の色を強調する(礫のところでは砂が礫の間に潜る)などです。山形大学チームはこれまでに約30程の図像を新たに発見しましたが、いずれもぼんやりしていました。台地の西部では礫が小さく砂が多い地層でできているため地上絵がとくに壊れやすいので、測量記録した後はなるべく近づかないようにしています。

台地の調査に入るときには、文化庁の許可のもと、平らなゴム底の大きなスリッパを履きます。昨年グリーンピースがハチドリの地上絵のそばにアピールの幕をおいて空撮するため、地上絵周辺を普通の靴で踏み荒らして世界の非難を呼びました。ハチドリの地上絵はペルーの象徴のひとつでコインの絵柄になっています。

ナスカの地上絵



沙漠にも雨が降る。2015年2月(ペルーは夏)の短時間の雨で洪水がハイウェイを横切った。山形大学ナスカ研究所に長期滞在している山本睦助教が遭遇して撮影しました。

ナスカの地上絵が損なわれる原因：車のわだち、道路建設、耕地や市街地開発といったことが主な原因です。遺跡として保護されるまでは、その見学に自動車が使われました。地上絵を探すうちに知らずに車で踏みつけて壊してしまったところが多くあります。ナスカ台地を横切る多くの道路がありました。台地の東部を走るバン・アメリカン・ハイウェイがトカゲの地上絵の胴を横切ってしまったことは有名です。局所的な強い雨のときに自然の流路が道路によって堰き止められて流れが変わってしまったところもあります。地球温暖化で雨が増えたためというのは短絡的な説明でしょう。

ナスカの地上絵のこれからの保存のために：知らずに壊されることのないようにその分布を明らかにすること、水の流路や土地利用の変化などを衛星画像や現地調査で継続的に監視することも必要です。山形大学のこれまでの人工衛星を使った調査手法は、平成27年版科学技術白書のなか(p.64)でコラム1・7「世界遺産の修復・保存への貢献」として取り上げられました。



道路によって流路が変わった。普段は涸れ川(阿子島2007.12空撮)。

留学生の活動レポート

人間文化学科 歴史学専攻4年
佐藤 ゆめ さん

留学のきっかけは、インドネシア、マレーシア、ブルネイ人留学生から歴史・文化等で多くを学んだ事です。ガジャマダ大学は18学部、東京ドーム64個分と巨大！現大統領の母校で、学生達は、国を担っていく誇りと熱意に満ちています。国際政治学とコミュニケーション学の授業では、学生の論理的且つネイティブのような英語力に脱帽し、あの時抱いた危機感と尊敬は、語学のモチベーションとなっています。留学生の国は多種多様で、6割がヨーロッパ圏。毎週の楽しみは、インドネシア語クラス仲間との母国料理dinner。他に、山大留学生と再会しおもてなしをうけたり、ジャカルタ社会人訪問、ボランティア、離島ホームステイ、留学生とのASEAN巡りなどを経験。多民族国家において、先入観や固定概念を持たない大切さを痛感しました。日々の気づきは、就活の軸や卒論テーマに直結しています。先生方、山形大学の皆様にご尽力賜り初派遣、大変実りある留学でした。Terima kasih banyak!(ありがとう)インドネシア

ガジャマダ大学 文化学部
2014年8月末～2015年1月末



地元の高校生と交流。

法経政策学科 法律コース3年
今田 雄 磨 さん

私はいまアメリカはテキサス州アーリントンのテキサス大学アーリントン校に短期留学として秋季だけ参加しています。何としても単位を取って帰るために毎日勉強を続けています。そんな中でもせっかく留学に来ているのだからアメリカならではの体験をしようと、週末には遠くへ足を運ぶことがあります。アメリカに来てからひと月の10月現在、私はニューヨークとヒューストンへ足を運ぶことができました。ニューヨークでは子供のころからあこがれていたニューヨークヤンキース対ニューヨークメッツのいわゆるサブウェイシリーズを観戦することができました。球場全体から聞こえる“Let's go Mets”と“Let's go Yankees”の掛け声には鳥肌が立ちました。ヒューストンではNASAのジョンソンスペースセンターを訪れ、シャトルを見学することができました。

観光も楽しみつつ、本業の勉強の方もしっかり単位が取れるよう頑張っています。アメリカ合衆国
テキサス大学アーリントン校
2015年8月～2015年12月



地域とともに

今年度の公開講座

◇前期公開講座(人間文化学科)

世界遺産ナスカの地上絵

学際的アプローチの成果と展開

人間文化学科 教授 坂井 正人・富澤 直人

平成27年度前期の公開講座は、「世界遺産ナスカの地上絵：学際的アプローチの成果と展開」というテーマのもと、6月1日から15日までの期間に5回の講座として開催され、様々な分野の専門家がナスカ研究について講演しました。



山本 陸 助教「ナスカ研究の現状と今後の展望」(6月1日)

【内容】山形大学ナスカ・プロジェクトの概要を説明したうえで、自身のこれまでの研究を踏まえ、今後のナスカ調査・研究の展望について考古学的見地から解説しました。

【感想】未知の世界に生きていた人々の息吹を少し感じることができました。先生が発見した神殿、とてもすばらしいですね。

渡邊 洋一 教授「認知心理学から考えるナスカの地上絵」(6月4日)

【内容】「人が行動する空間としてのナスカ台地」と「同じ地上に立って観察する地上絵」という観点から、認知心理学的考え方を紹介しました。

【感想】ナスカの地上絵を認知心理学など多くの分野から総合的に研究する方法が面白いので、ぜひ継続して頂きたいです。

本多 薫 教授・門間 政亮 学術研究員「情報科学からナスカの地上絵を考える ～体験学習を通して～」(6月8日)

【内容】情報科学の視点からのナスカ研究を紹介しました。また本講座では、パソコンと人工衛星画像を用いて、受講者自らが地上絵を探す体験学習が行われました。

【感想】とくに実習スタイルで地上絵を探す作業が面白かったです。

阿子島 功 名誉教授「ナスカ川と馬見ヶ崎川」(6月11日)

【内容】山形、米沢、東根の扇状地の近世～近代の水・土地利用、モンゴル・中国西部の乾燥地農法と比べながら、ペルー南部海岸の水利用や1万年前以降の古気候変化を復元するためにどのような調査を行ってきたか説明しました。

【感想】川をめぐってナスカと山形に共通点があることを初めて知りました。とても驚きました。

松本 雄一 准教授「地上絵を作ったのはどんな人々だったのか ～遺跡の分布から見るナスカ社会～」(6月15日)

【内容】地道な考古学調査によって明らかになってきた地上絵を作った人々の実態を紹介しました。

【感想】2000年にわたるナスカ台地の歴史と気候の変化の関係、その影響のもとで社会がどのように変化していたのかよく分かって、とても興味深かったです。

人文学部では、学生だけでなく地域の皆様にもご参加いただける公開講座・学術講演会を実施するとともに、地方自治体や海外大学・研究機関とさまざまな交流をしています。

◇後期公開講座(法経政策学科)

地域を学び、地域を考える

法経政策学科 准教授 坂本 直樹

後期の公開講座は、上記のタイトルで、10月1日から29日までに5回の講座として開催しました。「地方創生」が求められている中、今回はこれに応える形で、地域が課題を克服し、活力を取り戻す道を探ることをテーマとし、財政、交通、医療、環境、産業という5つの視点から講演しました。



坂本 直樹 准教授「地方財政の現状と地域が抱える課題」(10月1日)

【内容】国家財政との関係を踏まえながら地方財政の現状を解説し、地方が限られた財源の中で課題を解決していくための方向性を考えました。

【感想】地方財政の健全化のために、これからどのような財政が理想か、状況はどうか興味をひかれました。

砂田 洋志 教授「デマンド型交通と高齢化社会」(10月8日)

【内容】各地の特色ある事例を挙げることによって、デマンド型交通が交通弱者の中でも特に高齢者にとって大いに役立っていることを解説しました。

【感想】高齢者にとっての移動方法は、高齢化社会での課題であり、生活の活性化においては必須であるため、どのような事例があるか、研究結果があるか興味深かった。

尻無濱 芳崇 講師「地域包括ケアシステムと会計」(10月15日)

【内容】地域の包括的な医療・介護の支援・サービス体制である地域包括ケアシステムの構築に、会計がどのような影響を与えるかを解説し、今後の展望を示しました。

【感想】お金の面から社会保障を考えていく視点、無い袖は振れない国家予算の現状を踏まえると、どうにか抑制していく仕組みとしてのケアシステムの全体像がわかった。

杉野 誠 准教授「廃棄物政策と地域活性化」(10月22日)

【内容】ごみの有料化を経済学的な視点から検証し、どのように地域活性化が行われているかを考えました。また、山形市(山形県)が抱える問題にどのように廃棄物の有料化が活用できるかを考えました。

【感想】ゴミ処理という非生産的な活動を転じて地域活性化に結びつけていくという視点、とりくみは興味深く、また重要なのではないかと感じた。

山本 匡毅 准教授「地方圏の製造業と医療機器産業」(10月29日)

【内容】地方圏における医療機器産業の展開を具体的な事例を交えながら、特に山形県が強みを持っている製造業の視点から、その動向を解説しました。

【感想】どんな新しい産業がこれから山形で実施可能なのか、地方創生の時代に大切な課題だと思った。

ホームカミングデー2015

10月24日(土)に「ホームカミングデー2015」を開催しました。

今回で4回目となるホームカミングデーは、「ふすま同窓会95年記念祭」と同時開催し、人文学部301講義室を会場に、第1部「ティーデマン・ふすま賞、ふすま同窓会95年記念特別賞授与式」、第2部「ふすま同窓会95年記念祭記念講演会」、第3部「フリートークセッション」の構成で、卒業生・学生・教職員等が参加しました。



ふすま同窓会の「のぼり」がお出迎え

会場前でふすま同窓会と博物館のパネル展示

第1部

ティーデマン・ふすま賞、ふすま同窓会95年記念特別賞授与式



阿部宏慈理事・副学長(学長代理)の祝辞



ふすま同窓会95年記念祭特別賞の受賞者を代表して挨拶する遊佐夏美さん

第1部では、ふすま同窓会の長沼龍平会長から、ティーデマン・ふすま賞、ふすま同窓会95年記念特別賞が、それぞれ受賞者に授与されました。

ティーデマン・ふすま賞は人文学部と理学部の学生の優秀公募論文に対して授与されるもので、社会文化システム研究科修士課程の生田さん、社会文化システム研究科1年の布施京吾さん、理工学研究科博士前期課程1年の小島圭貴さんが受賞しました。

また、ふすま同窓会95年記念特別賞は、ふすま同窓会95年記念祭の学生参加行事として「グローバルな視点に立った世界の中の日本」をテーマに論文を募集したもので、最優秀賞に遊佐夏美さん(人文学部法経政策学科3年)、優秀賞に雁部万智子さん(人文学部人間文化学科3年)、高橋幹佳さん(理学部数理科学科2年)、佳作に吉岡慧さん(人文学部法経政策学科3年)、荻原秋穂さん(人文学部法経政策学科4年)が選ばれました。



総合司会の富田かおる教授



北川忠明人文学部長の開会の辞



ティーデマン・ふすま賞授与式の様子

第2部

ふすま同窓会95年記念祭記念講演会

第2部の記念講演会では、日本電子株式会社代表取締役の岩槻正志氏(理3回)並びに、株式会社さくらんぼテレビジョン総務局長の後藤泰子氏(人文15回)から講演をいただきました。



日本電子(株)代表取締役の岩槻正志氏「世界の最先端科学技術に貢献する日本の計測検査技術・ピコの世界を覗き見る」



(株)さくらんぼテレビジョン総務局長の後藤泰子氏「ローカルテレビ局に勤めてかれこれ30年」



12月公演のアナウンスを行う第43代模擬裁判実行委員会委員長の太田孝平さん(法経政策学科3年)



講演会の様子

第3部

フリートークセッション

第3部では、パネリストに記念講演会講師の岩槻氏と後藤氏、山形大学名誉教授の菊地仁氏、山形大学総務部総務課上席係長の樋口浩朗氏の4名を迎え、元木幸一人文学部副学部長の司会のもと、「学生生活と今」のテーマでトークセッションを行いました。



司会の元木副学部長



パネリストの岩槻氏



パネリストの後藤氏



パネリストの菊地仁名誉教授



パネリストの樋口浩朗上席係長



トークセッションの様子

中島宏准教授がベストティーチャー賞を受賞!

6月29日(月)、人文学部第2会議室において平成27年度「基盤教育ベストティーチャー賞」および「基盤教育ベストティーチャー新人賞」の表彰式が行われました。

同賞は、基盤教育において優れた授業を提供している教員を選定し表彰するもので、教員推薦または学生推薦により受賞者が決定されます。今年度は全学で6名の教員が受賞し、人文学部からは中島宏准教授が学生推薦により「ベストティーチャー賞」を受賞しました。昨年に続き2年連続の受賞となります。

中島准教授の専門は憲法学であり、基盤教育では主に「日本国憲法」を担当しています。講義は「教えることが明確」「楽しくわかりやすい」「主体的に参加しやすい」と学生に支持されています。



ベストティーチャー賞を受賞した中島准教授



山口教授と「Best Paper Award」賞状

山口昌樹教授が国際学会からBest Paper Awardを受賞!

7月2日、3日に大阪で開催された国際学会「SIBR-RDINRRU 2015 Conference on Interdisciplinary Business and Economics Research」において、山口昌樹教授が発表した論文「International syndicated loans and Japanese regional banks: Comparison between the first and second internationalization」が「Best Paper Award」を受賞しました。

山口教授の研究分野は国際金融論であり、国際銀行業における競争を中心に研究を続けています。今回の受賞論文は地方銀行による国際シンジケートローンへの参加という最新の動向を取り上げたものであり、地域経済の縮小によって困難に直面することが予想される地方銀行が成長分野として期待できる国際シンジケートローン市場でどのような行動をとっているかをデータから明らかにしました。

人文学部オープンキャンパスに1,930名!

8月1日(土)に山形大学小白川キャンパスにおいてオープンキャンパスが開催されました。

人文学部では、人間文化学科及び法経政策学科の「学科説明会」に加え、6名の教員陣による様々な分野の「模擬講義」、教員や現役大学生と、勉強やサークル、大学院を含めた学生生活などについて直接話ができる「先生とのつどい・在学生とのつどい」、大学ならではの特殊教室を巡る「教室見学ツアー」、短期大学生等を対象とした「編入学説明会」を開催し、ご来場いただいた高校生や保護者の皆様に人文学部の雰囲気を感じていただきました。

今年は昨年の1,800人を超える1,930名の方にお越しいただき、大盛況で、当日の様子は「人文学部 facebook」で随時配信し、オープンキャンパスに参加できなかった方にも当日の賑やかな様子を届けることができました。



「先生とのつどい」の様子

高校生が大学の勉強を体験 —アカデミックインターンシップ—

人文学部では、大学での勉強を一先先に体験してみたい高校生のみなさんを対象に、アカデミックインターンシップを開催しています(全学アカデミックキャンプとの合同開催)。

今年度は、8月6日、7日、17日の3日間、山形県内の高等学校10校と仙台南山高等学校から総勢43名の高校生のみなさんをお迎えし、講義とグループワークを行いました。

石澤靖典准教授、西岡正樹准教授、高橋和教授による講義を踏まえた成果発表会では、グループワークをサポートした人文学部学生チューターも討議に参加し、熱心な議論が行われました。



石澤准教授による講義の様子

法経政策学科の卒業生が司法試験に合格しました!

本学人文学部法経政策学科(法律コース)卒業生の高橋伸明さんが平成27年司法試験に合格しました。高橋さんは、2007年4月に本学人文学部法経政策学科に入学し、2011年3月に卒業後、同年4月に神戸大学法科大学院に進学しました。人文学部入学後に法曹への道を志した高橋さんは、西岡正樹准教授担当の刑法ゼミに所属し、「未遂犯に関する一考察」と題する卒業論文を執筆しました。法科大学院進学後は司法試験合格に向け猛進し、見事合格を勝ち取りました。



西岡准教授と高橋伸明さん(右)